

震災体験 本県の防災に

宮城の高校出身 県職員佐藤さん



東京大学大学院時代にまとめた研究成果を発表する県下田土木事務所総務課の佐藤和也主事=21日午後、千葉市の幕張メッセ

東京大学大学院で自然地理学を学んだ県下田土木事務所総務課主事の佐藤和也さん(24)が21日、本県沿岸平野部の地形を分析した津波災害リスクについて、千葉市で開かれていた日本地球惑星科学連合大会で研究成果を発表した。高校3年生の時、宮城県で東日本大震災の津波災害を体験した佐藤さんは、「東北の被災経験を、静岡の事前防災に生かしたい」と強い思いを持って大学院時代に研究をまとめた。

(社会部・寺田拓馬)

東大大学院での研究成果発表

「後背湿地も津波危険」

研究を取り上げたのは、浜松市西区と南区の「浜松低地」、静岡市清水区の「清水低地」、富士市と沼津市の「富士低地」、富士市と沼津市にまたがる「浮島ヶ原低地」の3カ所。いずれも砂の堆積で周囲よりも高くなつた「砂州」がで、その後「後背湿地が生まれた地形」で、富城県の仙台平野や右衛門平野などと成り立つが共通している。

佐藤さんは1960年から2005年まで人口集中地区の時間変化に注目し、地形変化の関係を調べた。富城県で中学高校時代を過ごした佐藤さんが本県を就職先に選んだのは、想定される南砂州を中心に開発が進み、90年代まで埋め立て地を増やしていく備えに携わることが自ら砂州の埋め立てに携わったのにに対し、浜松低地の使命と感じたからだ。

1年目の今はまだ直撃防災に関わる職務ではないが、高機能管理海辺の近い埋め立て地はだけでなく、都市基盤整備や住宅耐震化など、県の事業で防災の危険性。東日本大震災では津波が河川をさかのぼり、海から離れた傍晩湿地でも多数の死者が出た。浮島ヶ原では現在進行形で後背湿地に人口集中地区が広がっている状況で、佐藤さんは同じ浸水区域内でも地形で津波被害に差が出る。津波避難施設は砂州につくるべきだと、地形を意識した土地開発が必要」と訴えた。

静岡新聞

5月22日
月曜日

〒422-8033 静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社 電話(054)282-1111
月決め2,980円 本体 2,759円 消費税221円
1部130円(消費税込み)
◎静岡新聞社2017
浜松総局 浜松市中区旭町111
フレスター内 電話(053)455-3355
東部総局 沼津市若町1
サンプロント内 電話(055)962-0380